

## 『親指トムの物語』について

依岡道子

### A Study on *The History of Tom Thumb*

Michiko YORIOKA

#### はじめに

『親指トムの物語』は、『巨人退治のジャック』などと同様、妖精物語あるいはフェアリー・テイルズ (fairy tales) として現在もイギリスの子どもたちに親しまれている。(イギリスでは一般に、昔話や民話のことをフェアリー・テイルズと総称しているのであり、その物語の中に必ずしも妖精が登場しなくてもよいのである。) 時代がすすむにつれて、昔話とフェアリー・テイルズの分類が必要とされ始めたが、この『親指トムの物語』については、昔話の要素が強いようであり、それについては本文でふれることになる。『親指トムの物語』で一番古いと言われている版は、1621年のものである。以来350年にわたって読み続けられ、数多い versions がある。私に関心を持つのは、この物語の起源とともにその歴史の変遷である。「親指トム」というのは、いかなる存在であったのだろうか。「親指トム」の起源を知るに足る資料の入手は、かなり困難であるが、最も古いと言われている物語を中心に、その当時の資料と、それ以降の『親指トムの物語』の変遷について見てゆきたい。

#### I

「親指トム」の物語として一番古いと言われているのは、1621年に出版されたりチャード・ジョンソン (Richard Johnson, 1573~1659?)<sup>2)</sup>の作と言われている。リチャード・ジョンソンの経歴は殆んど知られていないが、チャップ・ブックとして出版されるような庶民が読みうる類の物語を書いた大衆作家であり、17世紀初期の頃、一般大衆に読み物に親しむ機会を与えた点では、大衆文学に貢献した人物と言える。

彼の作品のタイトルは、『<sup>ひと</sup>小人の親指トム—その背丈の低さの為にアーサー王のドゥウォーフと綽名された—の物語』 (*The History of Tom Thumb, the Little, for his small stature surnamed, King Arthurs Darfe:*)<sup>3)</sup>である。その本の表紙が(図1)にあるが、この物語のストーリーの展開を簡単な一枚の木版画によって描写している。後年、オピー夫妻 (Iona and Peter Opie) が、*The Classic Fairy Tales* (1974) の中に、“Jack the Giant Killer”, “Jack and the Beanstalk”などの物語とともに、“The History of Tom Thumb”<sup>4)</sup>というタイトルで入れている。リチャード・ジョンソンの物語を読み易い現代の字体に書き改めただけで、ストーリーは原作どおりである。

1621年の出版に続いて、1630年に『親指トム・その生涯と死—驚異と不思議な楽しさに溢れた男らしい素晴らしい数々の行為—この小さな騎士は、アーサー王の時代に生き、大英国の宮廷で有名になった』 (*Tom Thumb, His Life and Death: Wherein is declared any Maruallous Acts of Manhood full of Wonder, and strange merriments: Which Little Knight lived in King Arthurs Time*



図1. 1621年版『親指トム』のタイトル・ページ

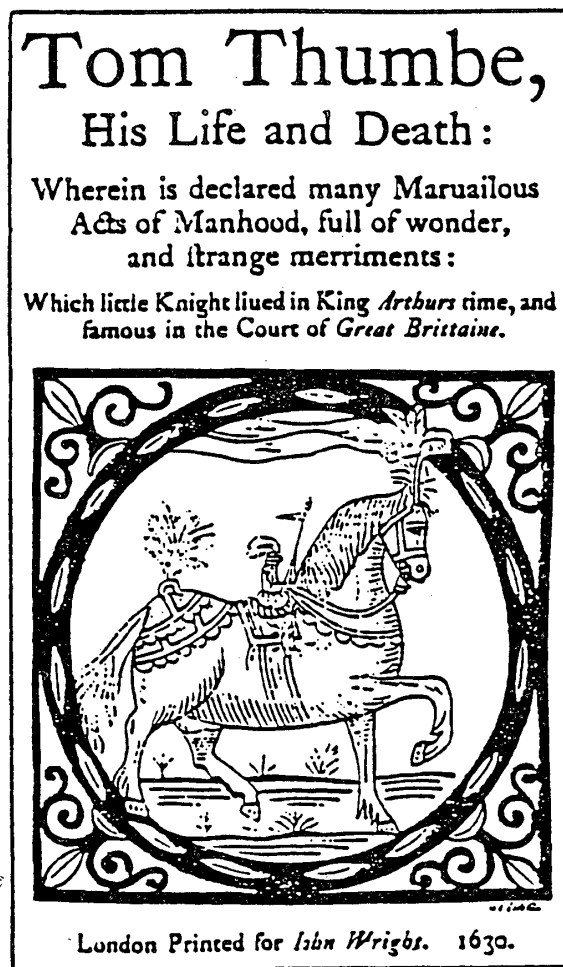


図2. 1630年版『親指トム』のタイトル・ページ

and famous in the Court Great Brittainne.)<sup>5)</sup>というタイトルのもとに、John Wright の為に出版されたとなっている。(図2)

以上の二種類の作品が物語の体裁を持つ最も古いと思われる版である。リチャード・ジョンソンの方は、作品の序文を除いて34ページの散文であり、1630年の版は、4歩格と3歩格で135行のバラッドであって、作者不詳である。リチャード・ジョンソンは、物語の序文にあたる文章の中で、「親指トム」について言及している。字体、綴りが古く読み難いが、「親指トム」という名前とその話しは既に人々に知れわたっていたことが分かる。1621年よりずっと以前から、老若男女、羊飼いや農夫にも、一日の厳しい労働の後に、この物語が楽しまれていたというのである。

リチャード・ジョンソンが「親指トム」の伝説を物語として出版する前、どのようなトムの物語が人々の間で話されていたか、推測することは難しい。しかし、「親指トム」の名前は、その当時出版された何冊かの本の中に見られる。出版年の古いものから見ると、1579年に、ウィリアム・ファルク (William Fulke, ?) がその *Heskins Parleament Repealed* の中で、(They feighed him to be a little child like Tom Thumb.)<sup>6)</sup> (p. 235) と、「親指トム」を小さな子どものたとえとして挙げている。次に、レジナルド・スコット (Reginald Scot) は、その『魔術の発見』(*The Discoverie of Witchcraft*, 1584)<sup>7)</sup>の中で、次のように記している。(図3)

それによると、「親指トム」はその当時、人々に知られていたと思われる様々な妖精の類に入れられている。即ち、(…われわれは幼年時代に、母親代わりの女中たちに、次のような生きものが出てくるよとよく恐がらせられたものである。牛怪獣、精霊、魔女、針鼠小鬼、小妖精、鬼婆、妖精、半人半羊、牧神、半人半獣、半人半鳥の海の精、さ迷う鬼火とか、海の精、半人半馬、小人、巨人、小鬼、毛づめの鬼、魔法使い、小妖精、取り換え子、夢魔、悪戯者の小妖精、ひずめ幻獣、悪夢の精、櫛の木の精、地獄の悪鬼、火龍、悪戯者の小鬼、親指トム、悪戯小鬼、騒ぎ屋の小人、骨無し怪物、とかこういった生きものたちだが、われわれは自分の影に脅えていたのである。)<sup>8)</sup> エリザベス朝まで妖精は恐ろしいものとされ、民間の迷信の中では、その悪業が強調され、不吉な出来事や人々の失敗までが妖精の仕業だとされていたのである。しかし、17世紀ころからそれより以前数世紀の間、民間に語りつがれてきたそのような生きものたちの映像は、少しずつ変貌してゆくのである。

次に、トマス・コルイエート (Thomas Coryate, 1577-1617) の『コルイエートの末成品』(Coryate's Crudities, 1611) の序として付けられた詩の中で、トムの名前が見られる。

Tom Thumbe is dumbe, vntill the pudding creepe

In which he was intom'd then out doth peepe.<sup>9)</sup>

(「親指トム」は口をきけない。クリープ(布地)の中に埋められ、そこから外を見ている。) というように、トムがプディングの中に落ちたという一つのエピソードが当時の人々にポピュラーな伝説であったようである。

ベン・ジョンソン (Ben Jonson, 1572-1637) の *The Fortunate Isles* の中には、次のように描かれている。(Or you may haue come / In, Thomas Thumbe, / In a pudding fatt / With Doctor Ratt.)<sup>10)</sup> 更に、マイケル・ドライトン (Michael Drayton, 1563-1631) の『ニンフィディア—妖精の宮廷』(*Nymphidia, the Court of Fairy*, 1627) の中には、「親指トム」の名前が数回出てくる。この物語は、妖精の騎士ピグウィギン (Pigwiggin) と妖精の女王マブの不義の關係に気付いた妖精王オベロンが、忠実なバックに命じて、マブを取り戻そうとする物語であるが、

### The xv. Chapter.

**B**Ut certeinlie, some one knaue in a white thæte hath coufened and abused manie thousands that waie; speciallie when Robin god-felloe kept such a coile in the countrie. But you shall vnderstand, that these bugs speciallie are spied and feared of sicke folke, children, women, and cowards, which through weaknesse of mind and bodie, are shaken with vaine dreames and continuall feare. The Scythians, being a stout and a warlike nation (as diuers writers report) neuer see anie vaine sights, or spirits. It is a common saieng; A lion feareth no bugs. But in our childhod our mothers maids haue so terrified vs with an ouglie diuell hauing hornes on his head, fier in his mouth, and a tail in his bræch, eies like a balon, fanges like a dog, clawes like a beare, a skin like a tiger, and a voice rozing like a lion, whereby we start and are afraid when we heare one crye: Wough: and they haue so frated vs with bull beggers, spirits, witches, bychens, elues, hags, fairies, satyrs, pans, faunes, sylens, hit with the canytricke, tritons, centaurs, dwarfes, giants, imps, calcars, coniuers, nymphes, changlings, Incubus, Robin god fellowe, the spoone, the mare, the man in the oke, the hell waine, the fierozake, the ruckle, Tom thombe, hob goblin, Tom tumbler, boneles, and such other bugs, that we are afraid of our owne shadowes: in so much as some neuer feare the diuell, but in a darke night; and then a polled sheepe is a perillous beast, and manie times is taken for our fathers soule, speciallie in a churchyard, where a right hardie man heretofore scant durst passe by night, but his haire would stand vp: right, for right graue writers report, that spirits most often and speciallie take the shape of women appearing to monks, &c: and of beafts, dogs, swine, horses, goates, cats, haire; of fowles, as crows, night owles, and thæke owles; but they delight most in the likenes of snakes and dragons. Well, thanks be to God, this wretched and cowardlie infidelitie, since the preaching of the gospel, is in part forgotten: and doubtles, the rest of those illusions will in thort time (by Gods grace) be detected and banish a waie.

図3. レジナルド・スコット『魔術の発見』1584年

この物語の中の妖精たちの超自然的な力は乏しく、ここに現われる「親指トム」も、妖精の page として出てくるだけである。(When by Tom Thumb, a Fairy page, / He sent it and doth him engage / By promise of a mighty wage / In secretly to carry;)<sup>11)</sup>

以上、当時(16世紀末から17世紀初期)の本に現われる「親指トム」の名前と、プディングに落ちたトムの伝承を見てきたが、リチャード・ジョンソンの『親指トムの物語』に、どのように発展していったのであろうか。

## II

『親指トムの物語』のおもしろさは、その人物自身にあるのではなく、物語の展開に見られるアイディア、発想のおもしろさにあると言える。「親指トム」は小さいがゆえに、いろいろの生きものにのみ込まれる。最初に、彼は母親が作っているプディングの大きなボールの中の布地袋に落ちる。その後、赤牛に草とともにのみ込まれ、牛の腹の中に入る。ジョンソンの話しでは、トムはそのフンの中から出てくるが、多くの版では、牛の口から吐き出される。次に、トムは巨人に捕まる。巨人は、トムが spirit か否かを確かめようと、骨も体も噛み砕こうとするが、トムは骨無し (boneless)<sup>12)</sup>であり、うまく巨人の体内に入り、その胃の中で走り廻る。そこで、巨人は胃の中のトムを3マイル先の海に吹き飛ばす。そこでトムは、海の魚にのみ込まれる。このように、牛、巨人、魚と3回のみ込まれるが、このいわゆる“swallow cycle”の原型は、旧約聖書の『ヨナ書』の中に見られる。そして、この swallow myths は、(... many swallow myths gradually change into stories which attempt to account for various natural events.)<sup>13)</sup>と言うように、自然の様々な異変を表わすためにストーリーの中に組み入れられている。

この“swallow cycle”というモチーフは、多くの作品に利用されているが、ヨーロッパの幾つかの国の伝説民話の中に「親指トム」と類似した主人公の物語がある。特に、民話をもとにしたグリムの童話には、小さな主人公の作品が集められていて、その中に「おやゆび太郎」 (“Thumbling” or “Tom Thumb”) とか「おやゆび太郎修業の旅あるき」 (“Thumbling’s Travels” or “Tom Thumb’s Travels”) がある。グリムの「おやゆび太郎修業の旅あるき」では、牛にのみ込まれたり、腸詰ソーセージに入れられたり、更に狐の口に入ったりする。オーストリアにも「親指太郎」がある。ハンスという名前の小人が、魚にのみ込まれ、ケーキの中に焼き込まれる。フィンランドの民話「おやゆび童児」は、ストーリーはイギリスのものとは全く異なるが、雄牛にのみ込まれ、次に狼にのみ込まれるモチーフが中心になっている。狼にのみ込まれる「赤ずきんちゃん」 (“Little Red Ridinghood”) に見られるように、子どもが動物にのみ込まれるという出来事は、民話における重要なモチーフである。

更に、その地方の最もポピュラーな食べ物の中に落ちるというモチーフも、この親指大の小さな主人公の物語では、共通に見られるものであり、プディングや腸詰ソーセージやケーキなどが上記の作品に用いられている。

## III

次に、「親指トム」の物語としての変遷を追ってみる。この物語の一番古いリチャード・ジョンソンとほぼ時を同じくして、1630年にバラッドが出版されたが、この二つの版について細部における相違点は別にして、ストーリーの大きな違いが見られる。ジョンソン作の方では、トムは Fairy の Queen から四つの贈り物をもらっている。

First, an enchanted Hat, the which by wearing hee should know, what was done in all parts of the world. A ring likewise enchanted, that hauing it vpon his finger, hee might goe if hee pleased into any place vnseene, and walke inuisible. Thirdly, a Girdle, that by wearing it, should change him into what shape soeuer he desired. And lastly, a payre of shooes, (that being on his feete) would in a moment carry him to any part of the earth, and to be any time where hee pleased.<sup>14)</sup>

世界中で起こっていることが分かる「魔法の帽子」、人に見られずに歩くことのできる「魔法の指輪」、身につけると望みどおりの形になることができる「ガードル」、履くと好きになるところに運んでくれる「靴」である。トムは別世界に連れてこられ、そこで不思議なもの、頭のない男、胸に頭についたもの、片脚の人、顔に1つ目の男等に会う。更に、この物語では、トムは巨人のガラガンチュア (Garagantua) に出会い、続いて小人ピグミー (Pigmes) の王であるトゥワドル (Twadle) に出会っている。このように、妖精の贈り物のせいで、トムは妖精の超自然的な力を一時的に持つのである。バラッドの方には、妖精の女王からの贈り物も巨人や小人との出会いもないが、アーサー王の騎士たちの槍の試合やトム自身の勇敢な騎士としての挑戦の場面が見られ、アーサー王の伝説の影響を受けていることがうかがえる。

大きな相違的のもう一つの例は、最後の場面にある。ジョンソンの物語では、トムは、魔法の帽子や靴を使って新なる冒険をし、その勇敢なる行易を宮廷人に語るところで終わっている。一方、バラッドの方では、トムは最後に病気になり、トムの身体は蜘蛛のように小さく凋み、死んで行くのである。(His armes and leggs consum'd as small / As was a spiders web, / Through which his dying houre grew on, / For all his limbs grew dead.)<sup>15)</sup> こうしてトムは、Fairy Queen によって Fairy Land へ連れて行かれる。アーサー王の宮廷では、人々はトムの死を悼み、40日間の喪に服し、トムの墓が建てられるというところで終わっている。トムはこの世では死んだのであるが、Fairy Land へ迎えられたことは、トムが妖精として生きていることを意味している。

エリザベス朝の頃には、前述のレジナルド・スコットの『魔術の発見』に見られるように、fairy や goblin は既に迷信であると考えられていたのであり、「親指トム」には超自然の能力は備っていなかった。彼の出生は魔術師マーリンの予言と処女降誕の神秘的要素が暗示されていて、一般には、妖精のグループに入れられている。アーサー王の宮廷に迎えられた時には、domestic spirit として可愛いがられたのであり、農夫の子どもがアーサー王の宮廷人になったという出世物語として、lower class の読者の満足を得たと考えられる。

上に述べた二つの版は、チャップ・ブックとして出版されていたのだが、この時代のチャップ・ブックは、特に子どもの為の読み物を提供していたわけではなく、恐らく子どもの為の読み物となったのは、もっと後年になってからである。(17世紀末から大量にチャップ・ブックが出版され、1部が1ペニーくらいで庶民が入手し易くなったが、その中で、子どもの読者を意識して出版されるに至ったのは、18世紀も大分、進んでからのことである)<sup>16)</sup> ということである。1700年頃に、木版画が数多く挿入され、子どもでも楽しく読めるようなチャップ・ブックの版が出版された。『驚異と歓喜に溢れた男の素晴らしい行為が描かれている親指トムの有名な物語』(The Famous History of Tom Thumb — Wherein is declared, His Marbellous Acts of Manhood Full of Wonder And Merriment)<sup>17)</sup> は、1630年のバラッドの版を基盤にし、それに短い散文の説明文が添えられている。また、Part the Second と Part the Third が付加され、トムの再生が二度繰り返されている。

Part the First は、1630年のバラッドの版とほぼ同じである。Part the Second は、Fairy Land へ連れて行かれた「親指トム」が、この世へ帰還するところから始まる。Fairy Queen がトムを吹き飛ばし、King Arthur の宮廷へ送り込んだが、落ちた場所は料理人が運ぶボールの中である。その後は、Part the First と同様の展開を見せるが、トムはelfとかfairyと呼ばれて、逃げ出し、粉屋の喉の中へ入り、再び吐き出される。次に川の中のsalmonにのみ込まれ、それが王様の前に運ばれ、トムは助け出される。王様に気に入られたトムは、王様と狩に出かけるが、トムが馬のかわりに乗っていたねずみを猫が襲い、トムは傷つく。その傷が原因となって、トムは死んでしまう。こうして再度トムはFairy Landへ戻される。

Part the Third では、Fairy Queen がトムを地上に送った時、彼は便器の中に落ちる。これは、後のトムの不幸を暗示しているような始まりであり、同時に物語は喜劇の様相を帯びてくる。時代は変わり、King Arthur から King Thonton になっている。王様に気に入られていたが、トムはFairy Landに居た間に、品行が悪くなっていて、彼の恩人への義務も怠り、女王に対して淫らな欲望を抱き、トムは女王の怒りをかってしまう。それがトムの悲劇をもたらし、トムは裁判にかけられ、絞首刑という判決を受ける。ここでも猫に襲われ、トムは逃亡するが、その途中蜘蛛の巣にひっかかり、蜘蛛がトムをハエと間違えて捕まえ、トムは死んでしまう。Fairy Queen の迎えはなく、「不道德な行為はもはや good people (妖精たち) から容赦されるはずはなかった」と結ばれている。

Thus sadly ended the favourite of immortals and of kings; but, from the fact that we hear no more of his going to Fairy Land, it is probable that his immoral conduct could not be condoned by the "good people."<sup>18)</sup>

Fairy Queen のペットであり、宮廷人の尊敬を得ていた「親指トム」は、もともとfairyの超自然的力はなかったが、fairyの助けを得てfairyと間違えられるような要素を持つ不思議な存在であった。しかし、Part the Second, Part the Thirdへと進むにつれて、トムのfairyの要素は次第に消えて行く。そして人間的俗性が身につくとともに、道化的色彩を帯びてくるのである。

18世紀は、笑劇やバーレスク劇(風刺喜劇)が、繁栄した時代であったし、又、オペラの栄えた時期でもあった。18世紀を代表する小説家ヘンリー・フィールディング(Henry Fielding, 1707-54)は、劇作により作家活動を始めたのであるが、彼は風刺のきいた喜劇をたくさん書き、上演させたのであった。『悲劇中の悲劇—あるいは偉大な親指トムの生涯と死』(*The Tragedy of Tragedies; or The Life and Death of Tom Thum the Great*, 1751)という作品がHay Marketの劇場で上演されたものとして1751年に出版されている。「二流の三文文士の注釈付」

(With the Annotations of H. Scriblerus Secundus)<sup>19)</sup>と書かれているが、恐らく作者はHenry Fieldingであろう。主人公は小さな「親指トム」ではあるが、題名は*Tom Thumb the Great*となっていて、しかもストーリーは全く異なる。アーサー王の娘ハンカムンカ(Huncamunca)に恋をして、その恋敵のLord Grizzleとトムが決闘してその首をとる。更に、アーサー王や王妃ドラロラ(Dollalolla)、捕虜になった巨人の女王グラムダルカ(Glumdalca)まで、恋のもつれた関係をつくり、ストーリーは展開する。最後には、タイトル通りに、登場人物の多くが死んでしまうという悲劇で終るのであるが、これは、風刺喜劇として上演されたと思われる。

同じく風刺喜劇のversionとして、E. L. Blanchard作の『親指トムあるいは魔術師マーリンとアーサー王の宮廷のよき妖精たち』(*Tom Thumb; or Merlin the Magician, and the good Fairies of the Court of King Arthur*, 1871)<sup>20)</sup>がある。これは、The Music-Publishing Companyから出版

#### 『親指トム物語』について

されたもので、音楽劇として上演されたものであろう。トムは Fairy Land に連れて行かれ、多くの妖精がトムにそれぞれの贈り物<sup>21)</sup>——‘grace’, ‘good humour’, ‘fancy’, ‘fun’, ‘mischief’, ‘activity’, ‘shrewdness’ と言った人間の性格、特質といった類のもの——を与える。トムの冒険は他の versions と同じであるが、最後に、Fairy Queen がトムをパントマイムの「道化師」ハーレクイン (Harlequin) にし、ジャイアンツの娘ハンカムンカ (Huncamunca) をハーレクインの恋人役コロンバイン (Columbine) にかえてしまう。更に、魔術師マーリンも入って来て、コックを「愚かで意地悪の老いぼれ」であるパンタルーン (Pantaloon), アーサー王までを道化 (Clown) にしてしまう。この版は恐らくパントマイムとして上演されたものであろう。

これより少し前の1860年に『小人の親指トムの韻文物語』(*The Metrical History of Tom Thumb the Little*)<sup>22)</sup>というタイトルで、18世紀初頭に三部で出版された版を基にして書かれた版がある。(この本の編集者の Preface には、1630年のバラッドを基にした1700年の版にもとづいて書いたと記されている。)

今世紀に入って、1903年には *Denslows Tom Thumb* が New York で出版され、完全に子どもの為の読み物になった。現在は、*English Fairy Tales* (1965), *The Fairy Tale Treasury* (1972), *Folk-Tales of the British Isles* (1986) などの物語集の中にそれぞれ「親指トムの物語」が入れられている。細部の相違は見られるが、特に物語の結末は、親指トムがアーサー王の宮廷で幸せに過す場合と、蜘蛛に襲われて死んでしまう場合とに分けられる。これは、「親指トムの物語」の最も古い1621年のジョンソンの物語と1630年のバラッドの物語の結末の相違が、今日まで続いているからである。

#### IV

時代の移り変わりとともに、「親指トム」は散文の物語とバラッドから風刺喜劇やパントマイムなど、いろいろな文字形式で登場してきた。また、その形式によって、扱われ方も小さな英雄的人物として崇拜されたり、道化的な扱い方を受けてきた。読者の対象も、かつては老若男女に広く親しまれていたが、現代は完全に子どもが対象の妖精物語になってしまっている。

「親指トム」という人物は、どういう存在であったのだろうか。『親指トムの物語』においては、魔術師であるマーリンの予言どおり、農夫の両親の子どもとして親指の大きさに生まれてきた。生まれは庶民であるが、この小さく不思議な存在であるトムは、勇敢なヒーローとしてアーサー王の宮廷を舞台にし、宮廷人を楽しませている。このことは、16世紀末頃の fairy とか elf に対する人々の考え方を反映している。人々の fairy とか闇の国の生きものに対する恐れというものが次第に消えていったのである。レジナルド・スコットが先に挙げていたさまざまな生きものは、乳母たちが子どもを寝かしつけるための「おどし」の為のものであり、「親指トム」はそういった生きものの1つとして、ゴブリンの仲間に入れられていたのである。

民間伝承とか中世の典型的な妖精の数々の属性を混ぜ合わせて、シェイクスピアは『夏の夜の夢』のオベロンやタイタニアやパックなどの妖精をつくり出したのである。リチャード・ジョンソンのつくった「親指トム」は、妖精の超能力はないが、fairy と人間の間の中間の存在として、読者を楽しませてきたのであった。しかしながら、『親指トムの物語』のおもしろさは、トム自身にあるというよりは、“swallow cycle” というアイディアのおもしろさにあったと言える。

注

- 1) 吉田新一編著、『英米児童文学』(中教出版, 1987), p. 180.
- 2) Harry B. Weiss, "Three Hundred Years of Tom Thumb" *The Scientific Monthly*, Vol. 34. Feb. 1932. p. 157.
- 3) Michael Patrick Hearn (ed.), "The History of Tom Thumbe", *Tom Thumb · Robin Hood's Garland · Jack and the Giants · Traditional Faery Tales* (Garland Publishing, 1977) p. 1.
- 4) Iona and Peter Opie, *The Classic Fairy Tales* (Oxford Univ. Press, 1974), pp. 30-46
- 5) Francelia Butlelr (ed.), "Tom Thumbe. His Life and Death: wherein is Declared Many Marvailous Acts of Manhood Full of Wonder, and Strange Merriments: which Little knight Lived in King Arthurs Time, And Famous in the Court of Great Brittain". *Masterworks of Children's Literature, Vol One* (Stonehill Publishing Company, 1983), pp. 14-23. 尚, 図2の表紙は, 注の2)のHarry B. Weissの論文中の図を使用した.
- 6) *Oxford English Dictionary, Vol. XI*, p. 123. "Tom Thumb"の項目に, 本文中の一行が載せられている.
- 7) Reginal Scot, *The Discoverie of Witchcraft* (Da Capopress, 1971)
- 8) フロリスト・ドラットル著, 『妖精の世界』(研究社, 1977) p. 88. (井村君江氏の翻訳使用)
- 9) Iona and Peter Opie, *op. cit.*, p. 30.
- 10) Michael P. Hearn, *op. cit.*, Preface x.
- 11) Michael Drayton, "Nymphida, the Court of Fairy," *Masterworks of Children's Literature. Vol. One.* p. 37.
- 12) 「骨無し」"boneless"というのは, 既出のレジナルド・スコットの『魔術の発見』の中で, 恐怖を与えるさまざまな生きものの中に入れられている.
- 13) Harry B. Weiss, *op. cit.*, p. 157.
- 14) Iona and Peter Opie, *op. cit.*, p. 43.
- 15) Francelia Butler (ed.), *op. cit.*, p. 19.
- 16) 小林章夫, 『チャップ・ブック』(駿々堂, 1988), p. 156.
- 17) John Ashton, *Chap-Books of the Eighteenth Century* (Chatto and Windus, 1882), p. 207
- 18) *Ibid.*, p. 221.
- 19) *The Tragedy of Tragedies; Life and Death of Tom Thumb the Great. As it is Acted at the Theatre in the Hay-Market. With the Annotations of H. Scriblerus Secundus.* (J. Watts, 1751)
- 20) E. L. Blanchard, *Tom Thumb; or Merlin the Magician, and the Good Fairies of the Court of King Arthur* (The Music-Publishing Company, 1871)
- 21) *Ibid.*, p. 9.
- 22) J. Q. Halliwell (ed.), *The Metrical History of Tom Thumb the Little.* (Printed for the Editor, 1860)